

大正十一年
五月廿五日





白井喬二著

最大長篇小説

富士に立つ影

第六卷

昭和三年七月七日印刷
昭和三年七月十日發行

富士に立つ影（普及版）第六卷

著者 白井喬二

發行者 下中彌三郎

東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川 薫

東京市麹町區下六番町一〇

（非賣品）

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番

株式會社

平

凡

社

電話九段 三三一六
四七六
七五四
番番番

富士に立つ影 第六卷

横山大観装幀
鏑木清方開幀

目次

幕末篇 (續)

情を吹く嵐	三
憂鬱はやて	四
生ける屍	九
愛慾無門	二三
成人せる兵吾	二三
最後のもの	二四

尋ね行く……………二六

明治篇

鐵道開通……………三七

希望の扉……………三五

杉浦美佐緒……………三六

足の侮辱……………四四

器械兩擊……………四四

偉人のゆくへ……………五九

北國の春……………五四

不滅の像……………五八

さらば富士よ……………六三

おほらかに……………空

挿畫執筆者

河野通勢

川端龍子

山本鼎

木村莊八

幕

末

篇

(續)

情を吹く嵐

一

ここは赤松總太夫の居間であつた。

母家の内でも鍵の手なりに裏向きに突き出しとなつてゐるから、屋根こそ續け別棟と等しくさすがに數奇を凝らした木口の立派さ、その他とりまわしの家具等も仲々美事づくめの八疊の一間であつた。

唐金の彫火鉢と少し離れ氣味にジツクリ座つてゐると、その横側から火鉢に近く女房の藤江がつまましい様子で坐つてゐた。

二人は年が大分違つてゐた。總太夫の方はもうかれこれ四十六七にもならうかと思はるゝけれども噂に名高い豪商御用金王といはれる人とは思はれぬ、一寸名匠柿右衛門とでもいつたやうな肌合の人品で年の割合には如何にもすすつきりとした男振りであつた。

こんなにお人柄でも一旦ムカツ腹を立てやうものなら、諸大名であらうが何であらうが屁とも思はず正面から打突かつて行くといふ俠氣があつていざといへば、どんな思ひ切つた事でもやり兼ねない人物だといはれてゐた。しかし女房藤江の兄佐藤光之助には、悉皆推服してゐるものと見え、純正浪士團の仕事は一切合財副長光之助に任せつきりて、自分は總長の名儀があつても、たゞ金圓出納の仕事を司る位なものであつた。

されば人々は赤松總太夫の任せつぷりをもじつて「飽迄、さうだよう」などいいつて蔭口を利いた。副長をあくまで信用して、しかりくで通させるところからこんな綽名をつけたのである。けれども佐藤副長の熱情には、誰も推服してゐるので、かういつたからとて決して悪口といふわけでは無かつた。

藤江の派手作りな瓜實顔が、年は違つても總太夫とよく似合つた。そして二人が落着いてかうやつて向ひ合つてゐるところは、何か名優の樂屋ででもあるかのやうに、何となく風情があつて、そしてあの優しい評判の藤江も、夫に對する時は可成り無邪氣で我儘であるが、少しも遠慮がないといふところが見えて、一層この場の様子を豊かなものにした。

ひよつとすると、「飽迄、さうだよう」は、女房に對するそれが、間接に兄光之助に及ぼした

もので、悪くいへば妹の威光の影に包まれてゐるのではあるまいか、とさへ思はしめる位であつた。

が、藤江はちつとも増長した態度を見せないで、

『あなた、生薑湯でも入れませうか』

『生薑湯？ おゝさうだね、遠州濱松小梅屋の生薑湯が届いてゐた筈だね』

『雪のある内にほしかつたのですけど、今頃になつてやつと届いたのですもの』

『で、つまり何か、おあまり物の拂ひ下げに、一杯御相伴させてくれるといふ寸法かね』

『あら、おあまり物だなんて』

『でもあれは巡邏の者が寒くつて可哀想だから飲ませてやらうと思つて取寄たのだらう』

『それはさうですけど、でも雪のある内に届いても、あなたにだけは、先づ一杯先きに差し上げますよ』

『それで安心したよ、だから今日はまア生薑湯は止さう、それよりか光之助様の苦勞を考へると、その方がよつぽど生薑湯を飲まされたやうなもんだ』

『兄といへば、あんなに度び／＼甲州街道口へ行つて、今度はうまく行くでせうか知ら』

『どうでもうまく行かなくつちや、江戸は闇だ。こんなに世の中が騒々しくなりかゝつた時は、出鼻に不良な奴をバタ／＼とやつ／＼けておかないと、麻と亂れた後からでは、もう手も足もつけられなくなつちまふ……幸ひこの赤松にや、諸大名との關係で、一寸お上も睨みが利かないから、浪人者の選り分けにや、丁度持つてこいの人間だ、といふ餘徳を種に、少しでも世の中の爲めに盡くして見たいと思ふのだ……さうだな、佐藤光之助の事だ、今度はひよつと物にして歸つて来るかも知れないよ』

『でも、山崎様にとつては、丁度悪い時でしたね』と藤江は氣の毒さうにいつた、『甲州街道の方へ急に出向かなくつちやなくなつた爲め、講武所に監禁されてるといふ山崎様の方の助けがお留守になつて……あゝやつて、お妹御のお八重様を、こゝへお泊めしておくのはいゝけど、兄様の山崎様に若しものがあつたら、どんなにお歎きになるかと思つて……』
『ふうむ、あの方何とか早くして上げなくつちやね、あゝこんな事は流石の金錢づくでも、どうにもうまく行くもんぢやないな』

と御用金王赤松總太夫も金力圈外の幕末風雲事に今更の如くしみ／＼と歎息した。

總太夫と女房藤江が自宅でかういふ話をしてゐた頃、噂の主佐藤光之助は江戸外れ中野上の千川上水の支流堤の上に腰を卸して、遙かにジツと甲州街道の彼方を微動もせず眺めてゐる時であつた。

傍らには見るも逞ましげな二人の團員が、左右から押し守るやうにして扈從してゐた。が、よく見ると二人つきりではない。十間ばかり先きの土手の下にも、やはり二人ばかりの團員がジツと佇んでゐた。またモツト向ふの茶畠の中にも、二人ばかりの人影の秘んでゐるのが見えた。……が、それよりもモツトく遠くに目を放つと、甲州街道に付き添ふた碎氷菜畑の中にも、またそれらしい人影があつた。こゝには二人でなく少くとも四五人の後姿がポツリ／＼と間を隔てゝ立つてゐた。

それは丁度何者をか待つてゐる様子であつた。

何者をかとはいふまでもない、幕許を得て遠く地方へ浪人者募集に出かけて行つた彼の講武所浪士團の頭目清川八郎の歸着を待伏せしてゐるものに違ひなかつた。

清川八郎が信州路甲州路等に入つて博徒甲斐の祐天をはじめ數十人の同志を加入せしめた事は、さきに仲間儀助の密偵によつて逸早くこつちには分つてゐる。あたかも今日はその清川八郎が、その後の土産をもたらし、意氣揚々として江戸表指して引き揚て來るといふ、その當日なのであつた。

佐藤光之助の語法をもつてせば、

『彼れ淺薄輕忽者流清川、醜惡奴輩今にして討たずんば』

である。そしてそれは單なる語法ばかりでなく、實際に熱血迸つて、今はもう寸刻も躊躇すべき時ではなくなつた。

『よし、さらば歸途を擁して一擧に事を決せん』

とばかり、副長佐藤光之助自から出馬におよんで團員の劍士十數名を引き具して、こゝにやつて來たのであつた。

内偵の時刻は刻々と押迫つて來た。彼れの通過は、あの碎氷菜畑に夕陽が薄れて、黄昏の靜寂に入らんとする薄暮時のはずであつた。と、すれば今やもうその時刻に押し移らんとする一瞬前、團員の緊張極度に達して一念無息の體で化石するのも無理はなかつた。



通雅

『副長、何か甲州街道に當つて光る物がございます、駕籠棒の金具ではございますまいか』
と扨從の團員は身をかがめて暮色殘光の中を透し見ながらさゝやいた。

『ウム、正しく駕籠金具の光りだ、皆、一陣の働きを祈つてやれよ』

『ハッ』

と左右の守護浪士は一緒に答へた。

一陣といふのは碎氷菜畑の同志であらう。然らば茶島が第二陣、堤の上下に屯するのは第三陣か、副長自から立つところは即ち本陣といふ事になるのであらう。

と見る、その碎氷菜畑の第一陣には忽ち颯と殺氣が漲つて斬り込みの意氣がグイと上つた事が、こつちからでも遙かに窺はれた。

『ウム』

と佐藤光之助は思はず唸つた。

その時である。甲州街道よりスタ／＼と近よつて來たぐだんの光り物は果して三挺の旅駕籠？ 一挺が清川八郎、今一挺が清川と一所に浪士募集の勸説に出かけたといふ備州の浪人池田徳太郎であらうか。とすれば今一人は誰であらう？ が、その時よく見ると三挺の駕籠ばかり

りてなく、その駕籠後ろに、七人ばかりの徒士の浪人者がさまで疲れた様子もなく、黄昏道の駕籠息に合せて、トツトと足並揃へ、少し早や刻みに踏み出しながら、元氣よくやつて來るのであつた。

『副長向ふは都合十人でございます』

と副長守護の一人がいつた。

『ウム十人だ、第二陣の者は、斬り込みと同時に第一陣に合するやう、早く傳令を走らせよ』

『ハッ』

といふと、守護の一人は土手下に轉がるやうに駈下りた。と見ると、その土手下の一人がまたすぐ驅出して行つて茶晶組に右の旨を傳達したらしい。だが、茶晶組の者もとくにその事を看知してゐたものか、別に動搖の様子もなく、息を殺してなほジツと第一陣の形勢を窺つてゐる様子であつた。

その時丁度旅駕籠の一團は第一陣碎氷菜畑の前にさしかゝつた。

『おゝ、今こそ』

と思つたその途端、碎氷菜畑の伏勢の内から一人の同志がいきなりヒヨイと飛び出して、旅